

第三回 王司徒巧みに連環の計を使う、暴兇を除き呂布司徒を助く

— 美女連環の計 —

○前回から今回まで

窮地を脱して陳留まで逃げた曹操は、董卓打倒を各地の諸侯に呼びかけます。これにこたえ、諸侯たち（十八路諸侯）は董卓打倒のために集結します。

諸侯連合軍の盟主には、名門出身の袁紹が推されます。このとき、劉備主従も諸侯の一人公孫瓚の軍に加わります。ここに董卓軍と諸侯連合軍の戦いがはじまります。

「温酒斬華雄（酒なお温かきに華雄を斬る）」

しかし、董卓軍の猛将華雄に、次々と打ち取られてしまう諸侯軍の部将たち。誰も歯が立ちません。そのとき、「私が華雄の首を献上しましょう。もし負けたなら、私の首をお斬りください」と関羽が進み出ます。

そして曹操が進める温かい酒を、関羽は「戻ってからいただくことにしましょう」と言い、青龍偃月刀を手に出して行きます。

やがて、陣太鼓しんたいこの音に続いて大きな鬨ときの聲が上がります。そこへ、関羽が戻ってきて、無言で華雄の首を放り投げます。さきほどの酒を手にしたところ、まだ温かいまま。関羽は温かい酒を一気に飲み干すという、ほれぼれとする関羽屈指くつきの名場面です。

ここでは、関羽と華雄の一騎打ちの場面を直接描かずに、陣太鼓と鬨ときの聲、そして諸侯たちが何が起こったかと固唾かたずをのんで待っている場面を描くだけです。そこへ関羽は悠然ゆうぜんと戻ってきて、華雄の首を放り出した。しかも酒は温かいまま。拔群ばつぐんの演出です。関羽の、沈着ちんちやくにして勇猛な姿を強く読者に印象付けます。

「三英雄、呂布りよふと戦う」

董卓は華雄を打ち取られたので、今度は呂布を虎牢関こらうかんに陣取らせませす。

諸侯軍の部将たちが次々と挑みますが、いずれも簡単に呂布に打ち取られてしまいます。このとき大喝たいかついっせい一声、張飛が一丈八尺の蛇矛じやぼうをしごいておどろかせます。

張飛と呂布は一進一退、勝負がつきそうにありません。これを見た関羽は、青龍偃月刀をふるって加勢します。しかし二人でかかっても、呂布を打ち負かすことができませす。

この様子を見て、劉備も雌雄しゆう二振りの剣をふるって加わります。さすがに呂布も受けき

れなくなり、虎牢関へと逃げだしました。

劉備・関羽・張飛と互角に渡り合った呂布は、『三国志演義』きつての最強の猛将として描かれます。

諸侯軍に圧迫された董卓は、洛陽らくやうに火を放って西の長安ちやうあんに移ります。一方、諸侯軍も空中分解し、諸侯はそれぞれ根拠地に帰還して自分たちの勢力拡大に専念するようになります。

いっぽう王允おういんは、曹操が董卓暗殺に失敗した後も、暴虐な董卓の排除を画策かくさくします。そして今度は、美貌びぼうの歌妓貂蟬かぎちやうせんを動かして、董卓と呂布を対立させるようにしむけます。貂蟬てれんてんたの手練手管に董卓と呂布は手玉に取られ、やがて敵対するようになります。そして、呂布がついに董卓殺しを決行します。

王允の計略に、董卓と呂布がみごとに引っかけたてしもう今回の名場面です。

○主な登場人物

王允おういん 後漢の大臣。漢王朝に忠義心を持つ。董卓の暴虐を見かね、暗殺を計画。はじめ、曹操に「七星宝刀しちせいほうとう」を渡し董卓暗殺をはかるが失敗。ついで、美女貂蟬を使って董卓と呂

布を仲違いさせ、呂布に董卓を殺させる。この策を「連環の計」という。

呂布 身長は一丈、赤兔馬にまたがり、方天画戟を武器とし、『三国志演義』きつての剛勇として知られる。最初に丁原に仕えたが董卓にそのかさされて彼を殺害し、董卓に寝返る。しかし、美女貂蟬をめぐり董卓と対立し、董卓を殺害する。

董卓 西涼の武将。肥満体で怪力。後漢の混乱に乗じ、朝廷を制圧する。少帝を廃して献帝を立て、後に少帝を殺害する。その後、暴虐を繰り返すが、王允の「連環の計」にかかり、呂布に殺害される。

貂蟬 王允の恩義に報いるため、「連環の計」をはかる。中国四大美女の一人。他の三人は春秋時代の西施、漢代の王昭君、唐の楊貴妃。

(本文抄)

司徒の王允は、庭に出て天を仰ぎながら涙を流した。

そのとき牡丹を植えた亭のあたりに誰かいて、ため息を漏らしているのが耳に入った。誰かとのぞき見ると、彼がわが娘のようにかわいがっていた歌妓の貂蟬であった。貂蟬は幼いころから王允に養われ、歌や舞を教え込まれて、年は十六になったばかり。容姿も人

並み優れていた。

貂蟬は王允に、「わたくしはだんなさまにお引き立ていただき、そのご恩は身を粉にしても、お返しすることができません。このごろ、だんなさまが眉まゆをしかめふさいでいらつしやるごようすを拝見し、きつとお国の大事があるのだらうと思ひながら、お尋ねすることもできませんでした。わたくしでお役に立つことがありましたなら、日ごろのご恩返しに、一身をなげだす覚悟です」と。

王允は貂蟬を奥座敷に招き入れると、頭を地面につけて平伏した。

驚いた貂蟬は、「だんなさま、どうしてこんなことをなさるのですか」

王允は跪ひざまずいて言います、「今、民衆の苦しみと国家の危機を救えるのは、おまえだけだ。董卓の養子に、呂布という者がおり、ずばぬけた武勇の持ち主だ。私の見るところ、二人とも好色漢こうしよくかんだから、『連環の計』を思いついたのだ。まずおまえを呂布のもとに嫁がせる約束をしたあと、董卓に献上する。おまえは二人の間でうまく立ち回って、彼らの間を引き裂き反目はんもくさせて、呂布に董卓を殺させ、大悪人の息の根を止めてほしい。天下を立て直せるのは、おまえだけだ。やっつてはくれぬか」

「わたくしはだんなさまのご恩にむくいるのなら、万死も厭いといません。どうかすぐに、わ

たくしをあいつに献上してください。それからは、わたくしに考えがあります」と貂蟬。王允はもう一度頭を地面につけて貂蟬に拝礼した。

(解説)

「連環の計」は、輪を連ねるように複数の計略を用いて目的を遂げるもので、ここでは、まず董卓と呂布を絶世ぜっせいの美女貂蟬の虜とりこにさせ、その後、貂蟬がこの二人を仲違いさせます。貂蟬は『三国志演義』の作者が作り出した架空かくうの人物ですが、『三国志演義』の影響力が大きかったため、中国の四大美女の一人に数えられるようになりました。

ちなみに、貂蟬以外の四大美女はすべて実在の人物です。

西施せいしは春秋時代に、越王勾践えつこうせんが呉王夫差ふさに献上した美女。夫差は彼女におぼれ、呉は越に滅ぼされることになりました。美人の西施が、病気で顔をしかめたところ、それを見た女性が、自分も顔をしかめれば美しく見えると思ひ、まねをしたといいます（「西施の顰ひそみに倣ならう」）。

漢の時代、元帝げんていが匈奴きよとの单于せんうに与えたのが王昭君おうしやうくんです。『後漢書ごかんじよ』によれば、彼女は選ばれて後宮こうきゆうに入りますが、元帝から何年も顧みられず、匈奴の单于に嫁する話が決ま

つてから、元帝は初めて王昭君を見ます。そして、その美しさに大いに驚き手放すのを惜しんだ、といわれます。

楊貴妃は一番有名です。白樂天の「長恨歌」は、その艶めかしさを次のようにうたいます。

眸ひとみを迴めぐらして一笑すれば百媚生じ

六宮りくきゆうの粉黛ふんたい顔色がんしよく無し

春寒さむうして浴よくを賜たまふ華清かせいの池

温泉ぬめ水滑みずならかにして凝脂ぎじゆうを洗しふ

侍兒しじたす扶たすけ起おこせば嬌きやうとして力ちから無し

楊貴妃の妖艶ようえんな姿が目に浮かぶようです。そして、貂蟬の美しさは、これら三人に肩を並べるのです。貂蟬、このとき十六歳。吉川英治の『三国志』は十八歳にします。さすがに十六歳では貂蟬の役回りとは違和感があるからでしょうか。

王允は貂蟬を見て、董卓打倒のはかりごとを思いつきます。そして、王允の恩義に命を捨てて答えようとする貂蟬。

(本文抄)

王允はまず、真珠をはめ込んだ金の冠かんむりをつくらせて呂布に贈ります。翌日、呂布は大喜びでお礼を言い、王允の屋敷を訪ねました。

王允は酒や肴さかなを用意して待ちうけ、呂布がやって来ると、奥座敷に案内します。

呂布は言った。

「私は一將軍に過ぎません。なぜ自分のような者に、司徒どのはこんなに過分の敬意を示されるのですか」

王允は、「現在、天下に英雄とよべるのは、ただ將軍お一人だけです。」と答えた。

呂布は大いに喜んだ。呂布は上機嫌じょうきげんで盃を重ねた。王允はさらに酒をすすめ、酔いがなかばまわったところを見計らみはらって、「娘を呼んで来なさい」と侍女に言いつけた。

しばらくすると、艶あでやかに装った貂蟬が入って来た。

王允は、「娘の貂蟬です。ご挨拶をさせたいと存じます」と言い、貂蟬に呂布にお酌しやくをするように命じます。貂蟬はお酌をしながら、意味ありげなまなざしを送った。王允は酔ったふりをして、「これ娘や、將軍にもつと盃を重ねてくださるよう、お願いしないか」

と。

そして、呂布が貂蟬に座につくよう勧めたが、貂蟬はわざと奥に引つ込もうとして、目に媚びをたたえたまま、王允の方を振り返ります。

「將軍は私が親しくしている方だ。そのように遠慮することはない」と王允が言い、貂蟬は王允の横に座った。

呂布はまばたきもせず、じっと彼女食い入るようにみつめている。

それからまた、何杯も盃を重ねたところで、王允は呂布に向かって言った。

「私はこの娘を將軍のお側に差し上げたいと思ってはているのですが、お受けいただけますか
な」

すると呂布は、その場にすくと立ち上がり礼をのべて言った。

「そうしていただけるなら、私は恩返しに、犬馬の勞をいとみせん」

「では、近いうちに吉日を選んで、お興入れさせましょう」と王允。

呂布は、天にもものぼる気持ちで、しきりに貂蟬に目をやり、貂蟬もまた流し目をして秋波をおくります。

しばらくして宴が果てると、呂布はくりかえしお辞儀をして、謝意を表し帰って行った。

(解説)

こうして、まず呂布を誘い出して、董卓と呂布を仲違いさせる計略が始動します。吉川『三国志』の一節から、

「(貂蟬)は雲鬢重たげに、呂布の目を羞恥らいながら、王允の蔭へ、隠れてしまいそうに摺り寄っている。

『・・・?』

呂布は恍惚とながめていた。」

呂布は、一目で貂蟬の美しさに心を捕らえられます。次に、董卓へのアプローチがはじまります。

(本文抄)

数日後、王允は董卓と出会い、呂布が側にいないのを見すまして、董卓を屋敷に招いた。「司徒どのお招きとあらば、さっそく出かけよう」と董卓。

翌日、董卓が到着した。王允は、山海の珍珠ちんみをつらねて待っていた。

王允が、「太師たいしさまのご盛徳には、伊尹いいん（殷王朝の名臣）や周公旦しゅうこうたん（周の文王の子で、武王の弟）ですら及びもつきません」と言うのと、董卓は大いに喜んだ。

酒を勧め樂器を演奏し、夜になり宴たけなわになったころ、王允は董卓を奥の部屋に誘った。

王允は言った。

「私は、昨今さつこんの天文を觀察しますに、漢王朝の命運はすでに尽きております。太師さまの功德こうとくは天下をふるわせておりますゆえ、舜しゆんが堯ぎょうから天下を譲り受け、禹うが舜の後を継いだようになされば、まさしく天の心にも人の心にもかなったものと思ひます」

「もし天命がわしのもとに帰すことになれば、司徒どのはさしずめ第一げんくんの元勳げんくんだろう」と董卓は笑った。

「わが家にかかえる歌妓かぎがおりますので、お目にかけてたいと存じます」と王允が言うと、「ほほう、それはさぞかい面白そうだ」と董卓。

王允は簾すだれを下ろさせると、ゆるやかに流れる笛の音につれて、大勢の歌妓にとりまかれた貂蟬が現れ、簾の外で舞いはじめた。

貂蟬が舞いおわると、董卓は側に来るように言った。

董卓は彼女の美しい容貌に目をとめ、「この女は」とたずねた。

「歌妓かぎの貂蟬でございます」と王允。

「歌はどうじゃ」と董卓。

王允は貂蟬に命じて、小声で一曲歌わせた。

董卓は口をきわめて称賛した。王允が貂蟬に命じて酒をすすめさせると、董卓は盃を手にしてたずねた。

「年はいくつかな」

「ちようど十六歳でございます」と貂蟬。

董卓が、「まるで仙女せんによのようだ」と言ったので、王允は立ち上がって述べた。

「この娘を太師さまに献上いたしたく存じます。お納めくださいますでしょうか」

「そんなことをされたら、どんな返礼をすればよいものやら」と董卓。

「この娘も太師さまにお仕えできましたなら、身に余る幸いでございます」と王允。

王允はただちに車を用意して、貂蟬を先に丞相府じやうしやうふに送りどけた。つづいて董卓もまた立ち上がって別れの挨拶をしたので、王允はみずから董卓を丞相府まで見送ってから戻

つてきた。

(解説)

董卓もまた貂蟬の美しさにくぎ付け。吉川『三国志』では以下のように、
「舞うー舞うー貂蟬は袖をひるがえ翻ひるがえして舞う。教坊きょうぼうの奏曲は、彼女のために、糸竹しちくと管弦の
技を凝こらし、人を酔よわしめずにおかなかつた。

『ウーム、結構だった』

董卓は、うめいていたが、一曲終わると、

『もう一曲』と、望んだ。

(中略)

『神仙しんせんの仙女せんによとは、実に、この貂蟬のようなものを云うのだろうな。いま、郿塢城びうじょうに
もあまた佳麗かれいはいるが、貂蟬のようなのはいない。もし貂蟬が一笑したら、長安ふんたいの粉黛ふんたいは
みな色を消すだろう』

そして王允は、貂蟬を呂布に嫁がせると約束したにもかかわらず、董卓に侍女じじょとして献

上してしまいます。これにより、董卓と呂布を仲違いさせる準備が出来上がりました。

(本文)

王允は途中まで帰ると、呂布とぼったり出くわした。呂布はむんずと王允の襟首えりくびをつかんで大声でたずねた。

「司徒どの、先日、私に貂蟬を与えると約束しておきながら、今また太師に差し出すとはどういうことだ、人を馬鹿にするにもほどがあるう」

王允は慌あわてて言った。

「これには訳があります。ここではゆっくり話もできません。どうか拙宅せったくにおいでくださ
い」

呂布はいっしょに王允の屋敷に行くと、王允は言った。

「將軍、どうしてこの老いぼれを疑われるのですか」

「おまえが貂蟬を丞相府に送りとどけたと聞いたが、どういうわけだ」と呂布。

「なんと將軍さまには何もご存じなかったのですか。昨日、太師さまが私に、『わしは明日おまえの家に行くぞ』とおっしゃいました。私はささやかな支度したくをしてお待ちしており

ました。太師さまはご酒を召し上がりながら、『聞けば、おまえに貂蟬という娘がおり、すでにわが息子の奉先ほうせん（呂布の字）あざな）にくれると約束をしたとか。わしからも頼みに来たのじゃ。ついでに一目、会わせてくれ』と言われますので、私はお断りすることもできず、貂蟬を呼んでご挨拶させました。すると太師さまは、『今日ひとまずこの娘を引き取って帰り、自分の手で奉先に嫁がせよう』とおっしゃいました」と王允。

「これは司徒殿を疑って申しわけない、私の思い違いだった。明日、あらためてお詫びにまいります」と呂布は礼を言つて帰つて行つた。

（解説）

呂布は王允の約束違反を詰め寄ります。しかし王允は、董卓が自分の手で貂蟬を呂布に嫁がせるといつて連れ帰つたと、うまく言いくるめます。呂布は王允のことばを信じて帰つたものの、心ここにあらずで、董卓の屋敷に様子を見に行きます。ここで、呂布と董卓の間を引き裂く「連環の計」がつながります。

（本文）

翌日、呂布はいろいろの様子をうかがったけれども、貂蟬の消息はまったくつかめなかった。侍女に問いただしたところ、「昨夜、太師さまは新しい方といっしょにおやすみになり、今もまだ起きてられません」と。

逆上した呂布は寢室の裏手にまわり、中をのぞき見た。

このとき貂蟬は窓の下に立ち、髪をとかしているところだったが、ふと窓の外の呂布に気づいた。

貂蟬はことさら両方の眉をしかめ、鬱々と楽しまない風情を装いながら、薄い絹でしきりに臉を拭った。呂布はしばらくのぞき見たあと、いったん立ち去ったが、しばらくしてまた奥に入って来た。

董卓はすでに起きていたが、呂布がやって来たのを見ると、「外は何事もないか」とたずねた。

呂布は「何ありません」と答え、董卓の側に侍立した。

呂布は横目でうかがうと、簾の向こう側で、貂蟬が行ったり来たりして、そつところらをのぞき、目で思いを伝えている。呂布は気もそぞろに夢見心地。董卓は呂布のようすを見て不審に思い、「用がなければ、しばらく下がっておれ」と言ったので、呂布はしぶ

しぶ退出した。

董卓は貂蟬を手に入れてからというもの、すっかりその色香いろかに迷い、一か月あまりも朝廷に出なかつた。ちよつとした病氣にかかつたところ、貂蟬は帯も解かずに看病したため、董卓はますます喜んだ。

呂布がある日見舞いに来ると、ちよつど董卓は眠っているところだつた。貂蟬は寝台のうしろから、なかば身を乗り出して呂布を見つめ、手で自分の胸を指さしたかと思うと、またその手で董卓を指さし、ほろほろと涙を流したので、呂布の心は張り裂けんばかりになつた。

目覚めた董卓は、呂布がまばたきもせず、寝台のうしろを見つめている姿を見てとり、くると寝返りをうつたところ、なんとそこに貂蟬が立っているではないか。

激怒した董卓は、「おまえはわしの愛姫あいきにいたずらする気か」と呂布を叱りつけ、今後の出入り禁止を申しわたした。

呂布は怒り恨みうらみながら帰る道すがら、李儒りじゆと出くわしたので、事の次第しだいを告げた。李儒は急いで董卓に面会を求めて言った。

「太師は天下をとろうとされているのに、どうしてささいな過ちで温侯おんこう（呂布のこと）を

とがめだてされるのですか。彼が心変わりでもすれば、大事がふいになつてしまいます」「どうすればよいか」と董卓。

李儒は言った。

「明朝、彼に金や絹を下賜かしされ、やさしい言葉をかけられたならば、無事にすむでしょう」董卓はこの意見に従い、翌日、人をやって呂布を召し出し、「昨日は病気のせいで、頭がぼんやりして、まちがったことを言い、おまえを傷つけてしまったようだ。どうか忘れてくれ」とあやまり、金十斤と綾絹あやぎぬ二十疋ひきを与えた。呂布は礼を言つて退出したものの、これ以後、董卓の側近くに仕えていながらも、貂蟬のことが心から離れなかつた。

(解説)

翌朝、不安を抱いて 丞相じやうしやう 府ふを訪れた呂布に、貂蟬は自分の切ない思いをそぶりでみせます。「おお、貂蟬」と呂布は胸をしめつけられる思い。董卓が無理やり貂蟬を自分のものにしたと思ひ込んだ呂布は、嫉妬しつとで心も張り裂けんばかりです。みごとな貂蟬の立ち回ります。

(本文抄) 鳳儀亭の密会

董卓は病気がなおったので、入朝して政務をとるようになった。呂布はお供をしたが、隙を見て、馬に飛び乗ってまっすぐ丞相府に向かった。戟げきを持ったまま丞相府の奥御殿おくごてんに入り、貂蟬の姿を見つけた。

貂蟬は、「裏庭の鳳儀亭ほうぎていのほとりで、待つていてください」と告げた。呂布は戟をひっさげて、ただちに鳳儀亭に向かった。しばらくすると、貂蟬がやって来るのが見えた。月の宮殿に住む仙女と見まぢがう姿だった。彼女は泣きながら呂布に訴えた。

「わたくしは將軍とお会いして、身のまわりのお世話をさせていただくことになり、わたくしの一生の願いもかなったと喜んでいました。ところが、思いもかけないことに、太師さまが良からぬ考えを起こされたため、わが身は汚されてしまいました。その場で死のうと思いましたが、まだ將軍と今生のお別れをしておりますゆえ、こうして恥を忍んで生き永らえていたのでございます。いま幸い、お目にかかることができましたので、わたしの願いもかないました。この身では二度とふたたび英雄にお仕えすることはできなくなりました。あなたさまの前で死んで、わたくしの本心を明らかにしたいと存じます」

言いおわると、蓮はすの花が咲く池に飛び込もうとした。

呂布は慌てて抱きとめ、泣きながら言った。

「ずっと前からおまえの気持ちにはわかっていた。ともに語り合えないのをひたすら恨めしく思っていたのだ」と。

貂蟬、「わたくしは今生ではあなたの妻になれませんから、せめて来世でお会いいたしたく存じます」と。

呂布、「この世ででおまえを妻にできないようなら、私は英雄とはいえない」と。

貂蟬、「今のわたくしには、一日が一年のようです。どうかわたくしをお助けください」と。

呂布、「私は今、ちよつとぬけだしてきただけで、あの老いぼれに疑われるとやつかいだから、すぐに行かねばならない」と。

貂蟬、「そんなにあの老いぼれが恐いのでしたら、わたくしがこの世で日の目を見ることはできませんね」と。

呂布は立ち止まり、「しばらく我慢してくれ、私がなんとか考えてみる」と言って立ち去ろうとした。

貂蟬、「わたくしは、將軍のお名前が雷鳴のようにとどろいていと知り、当世にただ

一人の英雄だと思いました。それがなんと他人の指図を受けてびくびくさされているとは思
いもありませんでしたわ」と涙をこぼした。

呂布は恥ずかしさで顔を真っ赤にして、貂蟬を抱きしめるとやさしい言葉でなぐさめた。
二人はひしと抱き合い、離れようとしなかった。

(※ところがそこに董卓が戻ってきます)

董卓は貂蟬を呼んだが、姿が見えない。慌てて侍女に問うと、「貂蟬さまは裏庭で花を
見ておられます」と言う。

そこで裏庭に行ってみると、ちょうど呂布と貂蟬が鳳儀亭の下で睦まじく語り合ってい
た。

董卓は烈火のごとく、大声で怒鳴りつけた。

呂布は董卓の姿にびっくり仰天、一目散に逃げ出す。董卓は立て掛けてあった呂布の
画戟をつかみとり、一突きにしようと思いかける。呂布の足が速くて、肥満体の董卓はと
ても追いつけず、そこで戟を投げつけられ、呂布はこれを地面に叩き落とした。

董卓が戟を拾い上げ、ふたたび追いかけたとき、一人の男が前に飛び出し、どしんと胸
に突き当たったので、董卓はあおむけにひっくりかえった。

王允によって董卓に献上された貂蟬が、自分に与えられると思いながら、心乱れて待つ呂布。

しかし、すでに董卓が貂蟬を自分のものにしてしまったことを知る。それでも呂布は貂蟬を諦めることができません。董卓の目を盗み、呂布は貂蟬と鳳儀亭ほうぎていで密会します。呂布と貂蟬の姿を見つけた董卓は、呂布に戟げきを投げつけ、怒鳴りながら追いかけますが。

(本文抄)

董卓にぶつかって来たのは李儒りじゆであった。

「おまえは、なんでここに来たのか」と董卓。

「呂布が『太師たいし(董卓のこと)に殺される』と言いながら、逃げて来るのに出くわしました。私は、何事が起きたのかと裏庭に入ったとたん、ぶつかってしまったのです」と李儒。「につつき呂布め、わしの愛姫あいきに戯れたむかかったからには、首を刎はねずにおくべきか」と董卓。

そこで李儒は、こういう話がありますと、例を引いて董卓に語った。

「むかし、楚の莊王は『絶纓の会』の宴で、愛姫に戯れかかった蔣雄の罪を問わなかったために、のち、秦の軍勢に追いつめられたとき、彼の死力を尽くした奮戦によって命を助けられました。この機会に貂蟬を呂布に賜ったならば、呂布は恩義に感じ、必ず死をもつてご恩返しをするであります。よくよくお考えください」と。

董卓はしばらく考えていたが、「おまえの言うのももつともだ。わしも考えておく」と言ったので、李儒は退席した。

董卓は貂蟬を呼んで問いただした。

「なぜ呂布と勝手なまねをしたのか」

貂蟬は涙を流し、「わたくしが裏庭で花を見ておりましたところ、ふいに呂布がやってまいりました。驚いて隠れようとしますと、戟をひっさげて鳳儀亭まで追いかけて来ました。呂布がよからぬことをするのではと恐れ、池に身を投げて死のうとしましたが、抱きとめられてしまいました。太師さまが来てくださったおかげで、お救けいただいたのでございます」と貂蟬。

「おまえを呂布に与えようと思うが、どうだ」と眼をとじて董卓がいう。

貂蟬は声をあげて泣きながら、「この身を突然、あんな乱暴な下郎にお下げ渡しになる

なら、死んだほうがましです」と言うや、壁にかかった宝剣ほうけんを手に取り、のどに突き立てようとした。董卓は仰天ぎょうてんして剣を奪い取った。

貂蟬は董卓の胸に倒れ込み、顔をおおい声をあげて泣きながら言った。

「これはきつと李儒の差し金かねにきまっています。李儒は呂布と親しいから、こんなことを考えついたのです。わたくしはあいつの肉を生きたまま食べたいくらいです」

「わしにどうしておまえを捨てられようか」と貂蟬を膝に抱き上げて董卓。

「わたしはここに長くはおれません。呂布に殺されるにきまっています」と貂蟬。

董卓は言った。

「明日、いっしょに鄆塢びゅうに帰り、楽しく暮らそう。くよくよ心配するな」

貂蟬はやつと涙をぬぐい、拝礼して感謝した。

翌日、李儒が来て、「今日は日からもよろしいゆえ、貂蟬を呂布のもとに送りとどけましょう」と言うと、董卓は、

「たわけたことを言うな。呂布はわしと父子の間柄だから、このことは具合ぐあひがわるい。ただあいつの罪は問わないことにする。おまえはわしの気持ちを伝え、あいつをうまくなだめてくれ」

「女に惑まどわされてはなりません」と李儒が言うと、董卓は、「貂蟬のことは、二度と言まな。言まえば斬きるぞ」と顔色を変えた。

李儒は退出し、天を仰あおいで嘆息たんそくして言うには、「われらはみな女の手にかかつて死ぬしるう」

(解説)

王允が貂蟬をつかつて仕掛けた「連環の計」。武器を使わずまた戦いもなく、虎牢関ころうかんで劉備主従と互角に戦った剛勇こうゆうの呂布、また残忍ざんにんな狼にたとえられた董卓を、貂蟬が翻弄ほんろうします。

李儒は董卓に「絶纓ぜつえいの会」を引き合いに出し、貂蟬を呂布に賜るよう説得します。

「絶纓の会」とは

春秋時代、楚の莊王そうおうが群臣ぐんしんと夜宴やえんをしたさい、寵姫ちやうきに酌しやくをさせてもてなします。たまたま風が吹き込んで、灯がすべて消えて真つ暗まごになってしまいました。するとこの時、寵姫の衣たわむを引いて戯たわむれる者がいました。寵姫はとっさにその男の冠かんむりの纓ひもを引きちぎり、

莊王に訴えました。「冠の纓が切れているのが下手人です」。

が、莊王は、灯火とうかをつけるまえに全員に冠の纓を切れと命じます。そして纓をお盆に集めた上で、灯火をつけさせました。

そのため、誰が戯れたのか分からないまま宴会は終わりました。

それから数年後、莊王が晋しんとの戦いで敵兵に取り囲まれた時、一人の勇士が斬り込んできて、莊王を救い出しました。莊王は「なぜ自分の身に代えてまで、わしを守ってくれたのか」と訊ねると、深手を負ったその大将は、

「私はいつぞやの会にて、王の寵姫に冠の纓をむしりとられた者に「ごさいます」と満足げに答えながら息を引き取った。

董卓は、この李儒の説得に、一旦は貂蟬を呂布に譲ろうとしますが、貂蟬の名演技にまた考えを変えてしまいます。

(本文抄)

董卓は郿塢びうにもどることにし、官僚たちはそろって見送った。

貂蟬は車中から、呂布が人混みのなかから車をながめている姿を目にしたので、顔をおおい、嗚咽おえつしているふりをした。車が遠く去ったあとも、呂布は岡のうえでをながめながら、嘆きなげと恨みに身をふるわせていた。

背後はいごから、「將軍、どうしてこんなところで嘆いていらっしやるのか」とたずねる者がいる。ふりかえってみれば、司徒の王允であった。

王允は言った。「しばらく將軍ともお目にかかれませんでした。今日は、太師が郿塢にお帰りなので、病いをおしてお見送りにまいりましたところ、なんと將軍とお会いすることができました。どうしてこんなところのため息をついておられるのですか」

「ほかでもない、あなたの娘のためだ」と呂布。

「まだ將軍にお与えにならないのですか」と王允は驚いたふりをした。

「あの老いぼれめ、自分のものにしてしまったのだ」と呂布。

「そんなことがあるとは信じられません」と王允がびつくりしたふりをしたので、呂布はこれまでのことを、事ことこまかにはなした。

王允は、「太師がこんな禽獸きんじゅうのような振舞いをなさるとは、思いもありませんでした」と言い、「まずはわたしのところでお話いたしましょう」と呂布を誘った。

王允は、酒を用意して呂布をもてなした。呂布がもう一度、鳳儀亭での貂蟬とのいきさつをくわしく話すと、王允は言った。

「太師が將軍の妻を奪うとは、まことに天下の笑いものです。もつとも、笑われるのは太師ではなく、私と將軍ですぞ。私は老いぼれの能無しですからかまいません。しかし、將軍は天下の英雄でありますのに、こんな屈辱を受けられるのが、なんとも残念です」

呂布が怒りを爆発させ、机を叩いて大声をあげたので、王允は慌てて言った。

「老いぼれの失言しつげんです。將軍よ、お怒りめさるな」

「あの老いぼれを殺し、恥辱を晴らしてみせるぞ」と呂布。

王允は彼の口を手でおおいながら言った。

「將軍、言葉に気をつけてください。私まで巻き添えになってしまいます」

「大の男がこの世に生をうけ、どうして他人の下で小さくなっておれようか」と呂布。

「將軍の才能は、董卓師に抑えられるようなものではありません」と王允。

「私はあの老いぼれを殺したいと思う。いかんせん、父子おやこの間柄ゆえ、あとで人にとやかく言われるのが気にかかる」と呂布。

王允は言った。「將軍の姓は呂りょ、太師の姓は董とうです。先日あなたに戟げきを投げつけるなど、

父子の情とはいえませんが」

呂布は奮然ふんぜんとして言った。「司徒どのに言われなければ、あやうく身を誤るところだつた」

王允は、呂布の決心がついたと見てとるとや、さつそく説得にかかった。

「將軍が漢王朝を扶たすけられるならば、史書は將軍の名声を百世の後まで伝えるでしょう。もし董卓に力をお貸しになるならば、悪名を万年にわたつて残すことになるでしょう」

呂布は頭をさげて言った。

「私の心はすでに決まつております。司徒どの、どうかお疑いくださいませな」

呂布は刀をぬくや、臂ひじを刺し血を出して誓つた。

王允はただちに同志の士孫瑞しそんずいと黄琬こうえんを呼び寄せて相談した。士孫瑞が言った。

「今、天子は病気が癒いえられたばかりですから、董卓に政務をとつてもらいたいと、依頼させればよろしいでしょう。その一方で、天子の密詔みつしやうを呂布に与えて、董卓を引き入れて誅殺するのが、最上の策です」

「誰を董卓のもとに行かせますか」と黄琬。

「呂布と同郡出身の李肅りしゆくは、董卓が昇進させてくれないと怨うらんでおります。この男を行か

せましよう」と士孫瑞。

王允は「わかった」と言い、呂布を招いて相談した。

呂布は、ひそかに李肅を呼び寄せて言った。

「かつて貴公は私を説得して、建陽けんよう（丁原ていげんのこと）を殺させ董卓に身を投じさせたが、今、董卓の罪悪は天下に満ちあふれ、神も人も憤激している。貴公は鄆鳩に行き、董卓に詔をつたえて入朝させてくれ。董卓を誅殺して漢王朝たうを扶け、ともに忠臣ちゆうしんになろうではないか」
「私もまたずつとあの悪人を除きたいと思っておりました。今、將軍がこのような考えをお持ちとは、どうして私に異存がありませんか」と李肅。

翌日、李肅は鄆鳩に到着した。李肅が挨拶すると、董卓は言った。

「天子から、いかなる詔か」

「天子さまにはご病氣から回復あそばされましたので、文武の官僚を集め、太師に帝位をお譲りになりたいとお考えになり、それでこの詔を出されたのです」と李肅。

「王允の考えはどうか」と董卓。

李肅は言った。

「王司徒はすでに人に命じて受禪台じゆぜんたい『（帝位てい禪讓ぜんじやうのための祭壇さいだん）』を築かせ、殿のお出

ましをひたすらお待ちになつておられます」

董卓は大喜びして、「わしは昨夜、一頭の龍りゅうが体におおいかぶさる夢をみたが、はたせるかな、今日、この吉報きつほうを得た。時機いっを逸してはならぬ」と言った。

出発にあたり、貂蟬に告げて言うには、「わしが天子になれば、おまえを貴妃に立ててやろう」

貂蟬は、計画が進んでいることを察知さつちしたけれども、喜んで拝礼し感謝した。

董卓が入朝したとき、官僚たちは礼服を身につけ、道路で出迎えた。李肅は手に宝剣を持ち、車につきそつて歩を進めた。北掖門ほくえきもんに到着すると、お供の兵士はすべて門の外に止め置かれた。董卓は、王允らがめいめい宝剣を持ち、宮殿の門のところところに立っているのを見ると、驚いて李肅にたずねた。

「剣を持っているのはどういう意味か」

李肅は返答せず、車をまっすぐ門の中に押しやった。

王允が大声をあげて呼ばわった。

「逆賊ぎやくてくが来たぞ。ものどもも出でえ」

その瞬間、両側から百人以上が戟げきをかまえさく架かをふるつて突きかかったが、董卓の甲冑かっちゆうに

阻はばまれ、刺しつらぬくには至らない。車から転がり落ちた董卓は、大声で呼ばわった。

「わが倅せがれの奉先ほうせん（呂布の字）はどこにいるのか」

呂布は車の背後から大声を張り上げて姿を現し、「詔によって賊を討伐する、覚悟しろ」と言い、戟の一突きで董卓の喉のどを刺しつらぬき、李肅がたちまちその首を切り取った。呂布は左手に戟を持ち、右手で詔をさし上げて、大声で呼ばわった。

「詔を奉じて逆賊董卓を討伐した。その他の者はすべて罪に問われない」

董卓のお供の兵士も役人もいっせいに万歳を唱えた。

王允は董卓の死骸しかいを、町の中にさらすように命じた。董卓はまるまると肥満していたので、兵士が、灯心を臍へそにさして灯火にしたところ、翌日まで消えず、死体から脂肪しぼうが地面に流れた。死体の側を通る者は誰も彼も、手でその頭を殴りつけ、死体あしげを足蹴にした。

（解説）

『三国志演義』では女性が活躍する場面はほとんどありません。そんななかで大活躍するのが貂蝉です。

貂蟬が呂布と董卓の二人を手玉にとり、ついには呂布に董卓を殺させることに成功します。貂蟬の話はフィクションですが、そのもとになったと思われる記述が『三国志』呂布伝にあります。

「呂布は董卓の侍女に手を出していたので、事が発覚しないか心中不安であった」、また「董卓はかつて気に入らないことがあって、手戟しゅげきを呂布に投げつけたが、呂布はそれを手で防いだ」、また、「王允は呂布が同郷どうきょうであったことから、武勇に優れた呂布を懐柔した」との話のを載せています。この三つの記述をつなぎ合わせて、『三国志演義』は「連環の計」に仕上げたのです。

一たび心を決めた貂蟬の、思いもよらない強さを描きます。こうして董卓は誅殺されましたが、その後の貂蟬はどうなるのでしょうか。

『三国志演義』では、このあと劉備が曹操とともに呂布と戦うところで、少し顔を出します。つまり、董卓誅殺の後も、引き続き呂布と行動をとりにしています。

また、吉川『三国志』では、「連環の計」を成し遂げた後、貂蟬は自害しています。吉川英治氏は、貂蟬の自害を通して、使命に殉じた貂蟬の清らかな心と悲劇性を描きます。私たちが抱く「貂蟬」のイメージは、ここで出来上がったようです。

吉川『三国志』は次のように貂蟬の最後を描いています。

「『貂蟬、貂蟬っ…』」

それは、わが家の後園を、狂気のごとく彷徨さまよいあるいている呂布の声だった。

そして、小閣しょうかくの内へかかれると、そこに横たえてある貂蟬の冷たい体を抱きあげては

又、

『なぜ死んだ』と頬ほずりした。

貂蟬は答えもせぬ。

彼女は、鄆びう鳩城の炎の中から、呂布の手にかかえられて、この長安へ運ばれ、呂布の邸しやうかくにかくされていたが、呂布がふたたび戦場へ出て行った後で、ひとり後園の小閣しょうかくにはいつて、見事、自刃じじんしてしまったのである。

『もう貂蟬も、おれのものだ。はれておれの妻となった』

やがて帰って来た呂布は、それまでの夢を打破られてしまった。

貂蟬の自殺が、「なぜ死んだか」彼には解けなかった。

「——貂蟬は、あんなにも、おれを想っていたのに。おれの妻となるのを楽しんでいたのに」

と思い迷った。

貂蟬は、何事も語らない。

だが、その死顔しにがおには、なんの心残りもないようであった。

——すべきことを為しとげた。

ほほえみ微笑の影すら唇のあたりに残っているように見えた。」

貂蟬は、恩義ある王允のために、自分の身を捧げて董卓を倒しました。このことは多くの人の心をとらえ、貂蟬が架空かくうの女性ではあっても、その最後をどうするかは、今でも一つのテーマになっています。

テレビドラマ『三国志・Three Kingdoms』は、『三国志演義』で貂蟬が引き続き呂布にしがたっていることと、「心美しい貂蟬」というイメージをつなぎ合わせて、実は呂布と貂蟬は相思相愛そうし そうあいの関係にあって、その後も行動をともし、呂布が殺されるとその後を追って自害したことにしています。